

サイデンステッカー 訳『源氏物語』続篇の〈涙〉

林 悠 子

一 はじめに

本稿は、前稿「サイデンステッカー 訳『源氏物語』正篇の〈涙〉」の続稿として、エドワード・サイデンステッカー (Edward G. Seidenicker 1921-2007) による英訳『源氏物語』(The Tale of Genji) 続篇の〈涙〉について調査し、考察を行うものである。

前稿では、サイデンステッカー氏が英訳の際に苦慮したこととして、『源氏物語』には作中人物たちが泣く場面が多いことを挙げ、英語圏の読者に受け入れられやすいよう「涙」を「多少は削った」と述べていることに注目し、英訳に際して〈涙〉表現がどの程度削られたのか、『源氏物語』正篇を調査対象として、報告・検討を行った。詳しくは前稿をご覧いただければ幸いであるが、以下に前稿の結論を簡潔に記す。

「泣く」「涙」「しほたる」などの語のみならず、「濡れた袖」や「虫の音」など涙を想起させる表現も含めた五八六例を『源氏物語』正篇の〈涙〉表現と認定した上で、サイデンステッカー訳と比較し、正篇全体の十四・三パーセントほどにあたる八四例の〈涙〉が英訳正篇で「削られた」と考えた。〈涙〉を流す

主体の男女差に注目すると、男性／男性たちの〈涙〉二九二例のうち三七例、女性／女性たちの〈涙〉二六八例のうち四〇例、その他、男女ともに〈涙〉を流す場合など二六例のうち七例が削られていた。サイデンステッカー氏は、『源氏物語』作中の男性が良く泣くことが英語圏の読者に強い違和感を覚えさせる可能性について述べているが、英訳に際しては、男性の〈涙〉を重点的に削ったとは言い難いと結論付けた。

『源氏物語』続篇の〈涙〉表現を認定する基準、および英訳で〈涙〉が「削られた」と判断する基準については前稿で用いたものを踏襲する。以下は前稿で掲げた基準だが、具体例を挙げた箇所などは、適宜続篇に合わせて書き換えた。

(一) 原文の〈涙〉表現の用例調査には、サイデンステッカー訳の底本でもある、山岸徳平校注『日本古典文学大系四・五』(岩波書店、一九六二・一九六三)を用いる。

(二) 「涙」「泣く」、「袖濡る」「しほたる」「目を押し拭う」「むせかへる」などの語のみならず、「露」や「虫の音」「鳥の声」など風物が〈涙〉の比喩表現として解せる場合も用例に含める。特に和歌の場合、風物の表現がそのまま詠み手の〈涙〉を表す

かは、和歌中の他の語とのかかわりも視野に入れて吟味すべき微妙な問題であるが、今回の調査では〈涙〉の比喩として解釈可能な場合は、〈涙〉表現として認定する。

(三)「え忍びあへず」「えためらはず」などの語は、「涙をこらえられない、我慢できない」の意の可能性はあるが、文脈によっては〈涙〉と関わらないことも少なくないため、〈涙〉表現の用例としては採らない。ただし、「(中君ハ) …よるづに、思ひ紛らはしつるを、さまざまに、思ひあつむる事し多かれば、さのみも、えもて隠されぬにや、こほれそめては、とみにも、えためらはぬを(中略)(匂宮ハ) わが御袖して、涙をのこひ給へば」(宿木・五・一六〇)のように、前後の〈涙〉表現から「涙をこらえられない」意であることが明確な場合は、〈涙〉表現として数える。

(四) 英訳には、〈涙〉表現が完全に省かれている例、〈涙〉表現が「悲しみを表す表現」に書き換えられている例、泣き方の度合いが軽減されている例が認められる。いずれも、〈涙〉が「削られた」例として判断した。

(五) 原文の〈涙〉の比喩表現は、現代語訳の際には「泣く」「涙」などの語を用いて、泣いていることを明確に示す場合が多いが、比喩表現のまま英訳されている例、〈涙〉は訳出されていると判断する。例えば、「橋姫の心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬれぬる」(橋姫・四・三二二)が、英訳で「Wet are my sleeves as the oars that work these shallows. / For my heart knows the heart of the lady at the bridge.」(790)とされているのは、〈涙〉が訳されている例として考えている。

以上の基準で調査した結果、続篇全体で二五五例の〈涙〉表現を認め、そのうち英訳では三三例が「削られた」と判断した。⁶⁾〈涙〉を流す主体が男性／男性たちの用例九三例のうち十例、女性／女性たちの用例一五八例のうち二三例が英訳では削られていた。宇治十帖に限って見れば、男性／男性たちの用例八六例のうち八例、女性／女性たちの用例一五五例のうち二二例が削られている。続篇で削られた〈涙〉の割合は、続篇全体で約十二・九パーセント、宇治十帖では約十二・四パーセントにあたる。これは、正篇で削られた十四・三パーセントに比べて、やや少ないが、著しく異なる数字とは言えない。サイデンステッカー氏が「多少は削った」と述べる〈涙〉の程度は、『源氏物語』全体を通じておおむね一貫していたと言えるだろう。

一方、続篇では女性／女性たちの〈涙〉が、男性／男性たちの〈涙〉のおおよそ一・七倍描かれ、英訳では男性／男性たちの〈涙〉が約十・八パーセント、女性／女性たちの〈涙〉が約十四・六パーセント削られている。正篇では、男性／男性たちの〈涙〉二九二例のうち三七例、女性／女性たちの〈涙〉二六八例のうち四〇例が、それぞれ英訳で削られており、女性の〈涙〉の方が用例数・割合ともに、少し多く削られている。続篇では女性の〈涙〉が削られる割合が正篇に比べやや高くなり、用例例においては女性の〈涙〉が男性の倍以上削られている。

本稿ではまず、続篇で女性の〈涙〉が重点的に削られた巻に注目し、それらの巻で〈涙〉が削られる際の特徴を明らかにする。その上で、男性の〈涙〉が削られた十例を検討することにより、サイデンステッカー訳続篇独自の〈涙〉の傾向を見定めたい。

二 続篇の〈涙〉の削られ方(一)

先ずは、続篇で女性の〈涙〉が多く削られていることについて、女性の〈涙〉が男性に比べて著しく削られている早蕨・東屋・浮舟・手習の各巻の用例を検討しながら、考察を試みたい。

二一 早蕨巻の〈涙〉の削られ方

早蕨巻で削られた二例は、いずれも弁の尼のものである。中の君が匂宮によって都に引き取られる直前、弁の尼は、薫・中の君それぞれと和歌を贈答し別離を悲しむ。原文では弁は、和歌を薫と贈答する際に、〔A〕「うちひそみ聞こゆ」(五二二)と涙に顔をゆがめている。また、薫の様子を中の君に報告する際には〔B〕「おもほしのたまひつる様を、かたりて、辨は、いとゞ、なぐさめがたぐくれ惑ひたり。」(同)とある。これらの箇所は、〔A〕「Her face was comforted with sorrow.」(879)〔B〕「Her own grief was beyond consoling」(同)とそれぞれ悲しみを表す表現に書き換えられる形で訳出されている。

ただし、薫・中の君それぞれと贈答した弁の和歌は〈涙〉が明示される形で訳出されている。さらに、中の君から別れのことばをかけられると「いよ／＼、わらはべの、戀ひて泣くやうに、心をさめむ方なく、おぼゝれ居たり。The old woman was weeping quite helplessly, like a child that has lost its mother.」(五二二／三／880)と、子供のように激しく泣く様子がそのまま訳されている。これらことから、二箇所の〈涙〉表現が削られても、当該場面を通じて弁の尼が涙に暮れていることは、英訳からも十分読み取れよう。また、

本稿では〈涙〉に関わる表現の範囲を広く取り、「うちひそむ」「くれ惑ふ」も〈涙〉の表現として数えているが、直接的に「泣く」「涙」の語がない箇所であるため、英訳に際しても〈涙〉表現が避けられた可能性は高い。

二二 東屋巻の〈涙〉の削られ方

東屋巻で、削られた〈涙〉四例は、〔C〕浮舟が匂宮の懸想を受けながら事なきを得た直後の浮舟の乳母、〔D〕匂宮の懸想を受けた浮舟を三条の小家に移し、慌ただしく常陸介邸に帰る中将の君、〔E〕中将の君からの手紙に答える浮舟の〈涙〉と女性が流した〈涙〉三例の他、常陸介の〈涙〉の一例である。常陸介については第三節に述べるとして、注目したいのは、〔C〕・〔D〕の場面では同座した浮舟が、〔E〕では浮舟からの返書を受け取った中将の君が泣いており、それらの〈涙〉は訳出されていることである。それぞれの場面で、浮舟の境遇を嘆き合う女たちのどちらかの〈涙〉を削った形と言えよう。

二三、浮舟巻の〈涙〉の削られ方

浮舟巻で削られているのは、すべて浮舟の〈涙〉である。稿者は、和歌・比喻表現を含めた十五例を浮舟巻における浮舟の〈涙〉と認めたが、うち三割弱にあたる四例が英訳では削られた形となる。以下、〔F〕・〔G〕・〔H〕・〔I〕に浮舟巻で削られた〈涙〉を示す。

〔F〕「かの人の、『のどかなるべき所、思ひ設けたり』と、昨日も、の給へりしを、かゝる、こと(薫ガ浮ヲ引取ル計画)も知らで、(匂ハ)と思すらむよ」と、あはれながらも、「そなた

に、靡くべきにはあらずかし」と、思ふからに、ありし(句ノ)御様の、面影に思ゆれば、我ながらも、「うたて、心憂の身や」と、思ひ續けて、泣きぬ。(五一二二二)

Niou could scarcely have known of his friend's plans when, in a letter the day before, he had spoken of finding a quiet place for her. She was very sorry, but she should not yield further, she knew, to his advances. And yet his image did keep floating before her eyes. What a wretched predicament to be in! (988)

[G] 暮れて、月、いとあかし。有り明の空を、思ひつゝ、涙の、とどま、止め難きは、「いと怪しからぬ心かな」とぞおぼゆ。(五一二四八)

In the evening the moon was bright. She was on the edge of tears as she thought of the moon in the dawn that other night. But she must drive it from her mind. (908)

[H] 右近は、いひきりつるよし、言ひ居たるに、君は、いよ／＼、思ひ亂るゝこと多くて、臥し給へるに、入り来て、ありつるさま、語るに、答へもせねど、枕の、やう／＼浮きぬるを、かじは、「ごかに、みるらむ」と、つゝまし。(五一二七一)

Hopelessly, Ukifune listened to Ukon's story. Then Jiu came in with hers. Ukifune made no comment. She wished they would go away and let her weep unobserved. (1010)

[I] (乳母)「物、聞こし召さぬ、いと、怪し。御湯漬」など、よろづに言ふを、「さかしがるめれど、いと見にく、老いなりて、われ亡くは、いづくにかあらむ」と、おもひやり給ふも、

いと、あはれなり。「世の中に、えあり果つまじき様を、ほめかして、言はむ」など、思すに、まづ、おどろかされて、先立つ涙を、つゝみ給ひて、物も言はれず。(五一二七四)

[...] Why will you not have something to eat? Come, a cup of this nice gruel."

Do please be quiet, Ukifune was thinking. The woman was still alert and perceptive enough, but she was old and hideously wrinkled. Yet another one who should have been allowed to die first—and where would she go now? Ukifune wanted to offer at least a hint of what was about to happen, but she knew that the old woman would shoot bolt upright and begin shrieking to heavens. (1011)

[F] は薰への逢瀬の場面で、薫から都への引き取りの計画を聞かされ、匂宮から同様の誘いがあつたことを思つて泣く場面、[G] は薫・匂宮双方から具体的に都に引き取られる日を聞かされ、匂宮との逢瀬を思い出して泣く場面である。[H] は薫に密通が露見、宇治の邸が薫の従者によつて警護されるようになって後、匂宮が宇治を訪れたものの浮舟とは逢えない場面で、浮舟は右近からは匂宮の来訪を断つたことを、代わりに匂宮に面会した侍従からは具体的な言ひてを聞かされる。浮舟はすでに死を決意しており、匂宮との最後の逢瀬の機会を逃したことを知らされて、「枕が浮くほど」泣く。[I] では、浮舟は自分を氣遣う乳母に死の決意をほのめかそうとするものの涙があふれ伝えられない。[F]・[I] は〈涙〉表現が除かれた例、[G]・[H] は〈涙〉の度合いが軽減された例である。

〔F〕・〔I〕において、浮舟は引用箇所と同一の場面で涙を流しており、それらの〈涙〉は訳出されている。〈涙〉を一箇所にとめる意識が働いたと考えられよう。もともと〔F〕の英訳では引用箇所直後の薫の言葉に原文にはない浮舟の〈涙〉への言及があり、〈涙〉を削ったというよりは「移し替えた例」と言えるかもしれない。浮舟巻末の〔I〕では、引用箇所の前後に「鐘の音の絶ゆる響きに音をそへて我が世盡きぬと君に傳へよ」*Join my sobs to the fading toll of the bell / To let her know that the end of my life has come.*」(五・一二七三／1011)、「姿えたる衣を、顔に押しあて、臥し給へりとぞん。The girl lay in silence, her soft sleeve pressed to her face.」(五・一二七四／1011)と、浮舟が明らかに涙に暮れている様子が訳出されているため、一箇所〈涙〉を削ることは問題にならないと考えたのであろう。英訳では、「the old woman would shoot bolt upright and begin shrieking to heavens」(老女は体を強張らせ、天に向かつて金切り声をあげるだろう)と、乳母の反応を予想した浮舟が、入水をほめかすのを思いとどまっている。

次に〈涙〉の度合いが軽減されている〔G〕・〔H〕を検討したい。サイデンステッカー氏は、物語の〈涙〉を誇張表現として認識しており、「時には、例えば枕が涙の川に流れ去るなどという、いささかバカバカしいことにもなりかねません。誇張を多少ともやわらげるといふこともできなくはない。例えば源氏が噴水のように涙をほとばしらせたというような描写なら、眼を曇らせたくらいに訳すわけです¹⁰⁾」と述べている。〔G〕は「涙の、いとゞ、止め難きは」を「She was on the edge of tears」(彼女は今にも泣き出しそうだった)として、泣く度合いをやや軽減する手法で、正篇にも類例が見

られることは前稿で述べた。

より注目すべきは〔H〕で、直訳すると「ちよつと extreme (極端)」「滑稽¹²⁾」になってしまふとサイデンステッカー氏が繰り返して強調した、「枕が浮くほどの〈涙〉」が「削られた」例である。英訳では誇張表現を排することで、「右近・侍従に見られないところで一人で泣かせて欲しい」という浮舟の心情描写に力点が置かれる形となっている。

ただし、前稿でも述べたことではあるが、正篇に二例見られる同様の表現は、「枕が流れる」比喻表現を残したまま訳出されていることには注意したい¹³⁾。続篇のもう一例も、

〔J〕(匂ノ) 御後手を見送るに、(中君ハ) ともかくも思えねど、たゞ、枕の浮きぬべき心地のすれば、「心憂き物は、人の心なりけり」と我ながら思ひ知らる。(宿木・五・五五)

Meanwhile, her eyes on the retreating figure, Nakanokimi was telling herself that a lady did not surrender to unworthy emotions. Her pillow might threaten to float away, but her heart must be kept under tight control. (897)

とそのまま訳出、注を付して、涙の誇張表現であることを説明する正篇須磨巻の注を参照するよう促している。

また、「恋をして音のみ泣けば敷妙の枕の下に海女を釣りする」(源氏積)を引歌した同じく宿木巻の次の箇所でも、〈涙〉の海の比喩を反映した訳になっている。

〔K〕(匂ノ) 御さきの聲の遠くなるまゝに、海女も釣するばかりになるも、(中君ハ)「我ながら憎き心かな」と、思ふ／＼、聞き臥し給へり。(宿木・五・一六三)

She heard his outrunners withdrawing into the distance, and an angler might have wanted to have a try at the waters by her pillow. Even as she wept, she rebuked herself for having surrendered so weakly to jealousy. (902)

[K] やは「an angler might have wanted to have a try at the waters by her pillow」(釣り人が(魚が釣れるか)彼女の枕の傍らの水辺で試してみたくなるかもしれない)と訳し、「おそらくは和歌の引用」と注を付けた上で、英訳本文の次の文で中の君が泣いていることを改めて説明している。

[J] [K] からは、サイデンステッカー氏が注を付けたたり、説明を加えたりすることを厭わず「涙」に「浮く枕」を英訳していることが窺える。浮舟巻は唯一の例外として比喩表現が削られている訳であるが、おそらくは浮舟が自ら死を選ぼうとする緊迫した場面で、英訳の読者に「滑稽な」印象を与える誇張表現を避けようとする意識が働いたものと考えられる。

二一四 手習巻の〈涙〉の削られ方

手習巻では、浮舟を保護した僧都の妹尼の〈涙〉が三例、浮舟の〈涙〉一例、計四例の「女の〈涙〉」が削られている。そのうち、浮舟の一例は和歌の中の表現で、この和歌一首全体が訳出されていないことから、意図的な〈涙〉の削減というよりは翻訳時のミスと考へ、考察の対象から外したい。

手習巻では、浮舟を亡くなった娘の代わりとして長谷観音に与えられたと信じる妹尼が、繰り返し〈涙〉を流している。浮舟の身を案じたり、亡き娘を思い出したりして泣く〈涙〉は巻全体で十一例

を数える。英訳で削られたのは [L] 妹尼が浮舟の回復を願ひ、涙ながらに献身的に世話をする場面(手習・五・三五六/1051)・[M] 不在の間、出家してしまった浮舟のために泣く泣く尼装束を用意する場面(手習・五・三九三/1070)・[N] 新年、浮舟と贈答し、浮舟が出家したことを悲しむ場面(手習・五・四〇三/1076)である。手習巻冒頭、衰弱した状態で保護された浮舟が回復するまで、尼君の〈涙〉は四度繰り返される。[L] は、そのうちの二箇所で、繰り返しを避ける意図で削除されたものと思われる。

次に [M] の原文と英訳を掲げる。

例の、答えもせず、背き居給へるさま、いと、若く、愛しげなれば、「いと、物はかなくこそおはしける、御心なれ」と、泣くく、御衣の事なご急ぎ給ふ。(五・三九三)

Silent as always, the girl was extraordinarily young and pretty as she sat turned away from the company. "What a useless little person I do seem to have taken in!" The bishop's sister soon recovered sufficiently to order a nun's habit for the girl. (1070)

初瀬詣から小野に戻った妹尼は、浮舟が自分の不在中に出家を果たしてしまったことを知らされる。妹尼の動揺は「物語での人、歸り給ひて、思ひ騒ぎ給ふこと、限りなし」The younger nun returned from her pilgrimage. She was aglashed at the news that awaited her.」(五・三九三/1070)・「(尼君へ)臥し轉ひひ、いと、いみじげに思ひ給へるにも So great was her agitation that she took to her bed」(同)と訳出されているが、[M] に引用した英訳では傍線部に示した通り、「すぐに平静を取り戻して、女君の

ための尼装束を用意させた」と、原文の〈涙〉が削られ、妹尼の理性的な面が強調される訳となっている。妹尼の人物像にややすれをもたらしかねない訳ではあるが、泣きながら尼装束を準備する心情と行動の矛盾を解消し、英訳の読者への分かりやすさが優先されたものと思われる。

出家して初めて迎える新年、尼君から贈られた若菜に添えられた歌に浮舟は返歌する。

[N] 雪ふかき野邊の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき
とあるを、「さぞ、おほすらん」と、あはれなるにも、「見るか
ひあるべき、御様」と、思はましかば」と、まめやかに、うち
泣い給ふ。
(五一四〇三)

“On drifted moors I shall gather early shoots.

May years of your life add to yours, as snow upon snow.”

How very dear to say so—and how much greater the joy it
over those years, she might live the life she deserved. (1076)

あなたのために若菜を摘み、自分の年齢をも重ねましょう—浮舟の和歌に「あはれ」と心を動かされた妹尼は、浮舟が尼姿なのを改めて惜しむ。その際に原文では〈涙〉が書かれるのに対して、英訳傍線部では「彼女がそのように述べるのは、なんて優しいことだろう、そして、もし彼女が享受するにふさわしい人生を送れたのだらたら、どんなにか喜びは増しただろう」と、尼君の心内を地の文が引き受ける形で訳出され、原文の「……まめやかに、うち泣い給ふ」は略されている。

以上、英訳で削られる女性の〈涙〉が男性の〈涙〉に比して著しく多い、早蕨・東屋・浮舟・手習の各巻について、〈涙〉の削られ

方の詳細を検討し、いずれの巻においても、原文で〈涙〉の用例数が多い人物が〈涙〉を削られる対象となっていることが確認出来た。早蕨巻では同一場面の同一人物の〈涙〉が、東屋巻では同一場面で泣く複数の人物のどちらかの〈涙〉が省略され、浮舟巻・手習巻ではそれぞれの巻で多く〈涙〉を流す浮舟・小野の妹尼の〈涙〉が削られていた。その巻で多く泣く女性の〈涙〉を削ることで、原文への「忠実さ」¹⁴⁾を損なわない範囲で〈涙〉を削ろうとしたものと理解出来る。

三 続篇の〈涙〉の削られ方 (二)

前節では、続篇で女性の〈涙〉が集中的に削られる巻に注目し、具体的な削られ方について検討した。本節では、続篇で削られる男性の〈涙〉について、考察を試みたい。英訳続篇で削られる男性の〈涙〉は全部で以下の十例である。

[O] (左近中將) 「この櫻の、老木になりけるにつけても、過ぎにける齡を、思ひ給へ出づれば、あまたの人におくれ侍りにける、身の憂へも、とめがたうこそ」など、泣きみ笑ひみ、きこえ給ひて、例よりは、のどやかにおはす。
(竹河・四一二六六)

[P] It is a very old tree and it somehow makes me aware of how old I am getting myself. And I think of all the people who once looked at it and are no longer living.” By turns jocular and melancholy, the brothers paid a more leisurely visit than usual. (759)

[P] 「竹河」謡ひて、御階のもとに踏み寄る程、(藏人少将へ)

すぎにし夜のはかなかりし遊びも、思ひ出でられければ、ひが事もしつへく、涙ぐみけり。(竹河・四二二八)

As the lieutenant stepped ceremoniously to the royal staircase and sang "Bamboo River", he was so assailed by memories that he was perilously near choking and losing his place. (768)

〔Q〕あす入り給はむとての日は、例ならず、(八宮入)こなたかなた、たゞすみありき給ひて、見給ふ。いと、ものはかなく、かりそめの宿りにて過ぐい給ひける御すまひの有様を、「亡」からむ後、いかにしてかは、若き人の、たえ籠りては過ぐい給はむ」と、涙ぐみつゝ念誦し給ふおまは「とて、清けなり。

(稚本・四二二五)

On the evening before his departure he inspected the premises with unusual care, walking here, stopping there. He had thought of this Uji villa as the most temporary of dwellings, and the years had gone by. Everything about him suggesting freedom from worldly taints, he turned to his devotions, and thoughts of the future slipped in among them from time to time. His daughters were so very much alone—how could they possibly manage after his death? (807)

〔R〕水の音なひ、なつかしからず、宇治橋の、いと物ぶりて、見えわたさるゝなど、霧晴れゆけば、いとち、荒ましき岸のわたりを、「かゝる所に、いかで年を経たまふらん」など、(匂入)うち涙ぐみ給くるを、(中君入)「いと、恥じかし」と、聞き給ふ。(総角・四二二八)

The roar of the waters was loud, and as the mists cleared from the moldering old bridge the riverbank seemed wilder, more wasted. How had they been able to pass the years in such a place? Nakanokuni was apologizing inwardly for her rustic dwelling. (847)

〔S〕(阿闍梨入)「いかに、今宵は、おはしましつらん」など、きこゆるついでに、故宮の御ことなど聞こえ出でて、鼻、しばし、うちかみて、「いかなる所におはしますらん…」

(総角・五四五六)

"How did my lady pass the night?" asked the abbot, going on to speak his voice sometimes wavering, of her father. "And in which realm will he be now? I wonder. [...]" (863)

〔T〕夜の、氣色いよんけはしき風の音に、(匂入)人やりならず、泣き臥し給くるを、おすがたへ、例の、物隔つゝ、きこえ給ふ。(総角・四二四六)

A fierce gale came up in the night. Though he had no one to blame but himself, he was very unhappy. She finally relented and spoke to him, though still through curtains. (870)

〔U〕(薫)「言ひじも、むなしき空にのほりぬる煙のみつゝ、誰も、のがれぬ事ながら、おくれ先立つ程は、猶、いと、言をかひなかりけれ」とても、又、泣き給ひぬ。阿闍梨召して、例の、かの、御忌日の經・佛の事など、のたまふ。(宿木・五一九五)

["..."] I know that the day will come when I too will vanish into skies. "The dew falls soon and late—but that knowledge

does not make the wait any easier." Sending for the abbot, he gave instructions for memorial services. (918)

[V] (常陸介) はざりかなる曲の物など、教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾き合はせて遊ぶ時は、涙もつゝ、ますをがましき¹⁰²¹、ますがに物めでしたり。(東屋・五―一二四)

On a pleasant evening he would have then at a lively strain, and the effusions with which the governor greeted the performance were quite cleansing. (938)

[W] (右近) 「……や、か、思ひしむらむ折になん、仰言なぐと、夢りて、げに、いと夢のやうなりし」¹⁰²²も、語り聞かえまほしき」¹⁰²³と、言ひて、今日は、動くへくもあらず。大夫も、泣きて、「更に、此の御中のこと、まかに知り聞かぬせ侍らず。物の心も知り侍らずながら、たぐひなき、御心ざしを、見たてまつり侍りしかば……」(蜻蛉・五―二九七)

“[...] but if someday I manage to pull myself together, I shall call on him, you may be sure, whether he sends for me or not, and describe this nightmare to him.” They could not persuade her to go with them. “I did not have all the details and was not in a good position to judge,” said Tokikata. “but I did sense something very unusual in his feelings for her. [...]” (1022)

[X] 「いと、めでたき御さいはひを捨て、亡せ給ひにける人かな。おのれも、との人にて、参り仕うまつれども、近く、召し使ふ事もなく、いとけ高くおはする殿なり。若き者どものごと、仰せられたるは、頼もしき事になん」¹⁰²⁴、喜ぶを見る

にも、まじつ、「おはせましかば」と思ふに、(浮舟母) 臥しまろびて、泣かる。守も、今なむ、うち泣きける。さるは、おはせし世には、中へ、かゝるたぐひの人しも、尋ね給ふべきにしも、あらずかし。(蜻蛉・五―三〇九―一〇)

“So she died on us just when she was having all this good luck? I was with his family for a while, but he was way up there on top, and I didn't really know him. So he's thinking of the others, is he?” The mother lay sobbing. Such cause for joy, and Ukifune was not here to partake of it. The governor managed a tear or to of his own. He thought it unlikely, however, that Kaoru would have paid much attention to them if the girl had lived. (1028)

[O] は、竹河巻玉鬘長男の左近中将が庭の桜を前に往時を懐かしむ場面。泣くと同時に笑う「泣きみ笑ひみ」が英訳の読者に分かりにくいことから、この語が正篇でも書き換えられて訳されることが多いことは、前稿で詳しく述べた。続篇でも他に一箇所同様の例が認められる¹⁰²⁵。左近中将の〈涙〉は同じ場面にもう一箇所見られ¹⁰²⁶、そちらは訳出されていることもあり、削りやすかったものと考ええる。同じく竹河巻の [P] は、玉鬘の大君が冷泉院に参内した翌年正月、大君の熱心な求婚者だった藏人少将が、男踏歌に参加する場面である。少将は、前年正月の玉鬘邸での小宴を思い出して、舞を間違えそうなくらい動揺し、涙ぐむ。英訳では「もう少して呼吸困難になり、舞を間違える危険があるほどだった」と訳され〈涙〉への直接の言及はない。

[Q] は八の宮が阿闍梨の山寺に籠もる前日、自邸を見回る場面

で、原文の「涙ぐみつ、念誦し給ふさまは、いと、清げなり」の部分
が英訳では訳出されていない。英訳では八の宮が姫君たちを心配
する原文「亡からむ後、いかにしてかは、若き人の、たえ籠りては
過ぐい給はむ」を「彼の娘たちは本当に二人きりで彼の死後どう
やって生きて行くことが出来るだろう」と、語り手が代弁する形を
取っている。〈涙〉を訳出するよりは人物の切実な心情に重きを置
いた訳し方であり、前節〔N〕と近似する例と言えよう。

〔R〕はより前節〔N〕に近い例と考えられる。中の君の境遇に
対する匂宮の感慨「かゝる所に、いかで年を経たまふらん」が英訳
傍線部では地の文に引き受けられる形で訳出されている。

〔S〕では阿闍梨が「鼻、しば／＼うちかみて」故八の宮の行方
を心配している箇所が、「時たま声を震わせながら」と、〔T〕では、
通いが途絶えていた間に姉を亡くした中の君に逢瀬を拒絶された匂
宮が「人やりならず、泣き臥し給へる」が「彼は彼自身他に非難
すべき相手はいなかったのだが、とても不幸だった」と、それぞれ
書き換えられている。

〔U〕は統篇で薫の〈涙〉が削られる唯一の例である。薫は当該
箇所直前に弁とともに涙を流しており、それらの〈涙〉は訳出さ
れていること¹⁷から重複を避けたものと考えられる。正篇では、この
ように作中人物同士が会話し、「涙の共有」が行われる場面が多数
見られ、引用符を活用しながら〈涙〉がまとめられる傾向にあるこ
とを前稿で詳述した。一方、統篇では前節〔C〕〔D〕の他には類
例を見出せなかった。統篇の〈涙〉が「涙の共有」が多い正篇とは
異なる傾向を示すことが指摘されており、英訳における正篇・統篇
の〈涙〉の削減のされ方の違いとも大きく関わると思われる。

〔V〕は田舎暮らしが長い常陸介が実の娘のために、姫君の音楽
教育にはふさわしくない内教坊から師を招く場面。姫君には不適切
な曲が教えられていることも理解せず、娘の演奏に感激して涙を流
す介の無教養が強調される。傍線部英訳は「演奏を聞いた地方長官
（常陸介）の口からほとばしり出る言葉は耳をつんざくようであっ
た。」と原文の感激の〈涙〉を削り、大声で喜ぶ介の品の無さと愚
かさにより力点が置かれている。

〔W〕では浮舟失踪後、匂宮の従者である時方が、浮舟方の侍女、
右近と話す場面で、時方の〈涙〉が削除されている。原文では直前
に右近が泣く描写があるが、英訳では右近と時方を含む従者たち全
員が泣く描写に書き換えられており、〈涙〉がまとめられた例と言
えよう。

〔X〕は浮舟の失踪後、母中将の君が夫であり、浮舟の継父であ
る常陸介に、薫と浮舟の関係を聞かせる場面である。浮舟を冷遇し
ていた常陸介だが、薫が、亡くなったと思われる浮舟のために、
常陸介の子供たちへの処遇を約束したことを知らされ「今なむ、う
ち泣きける」とようやく浮舟を悼む気持ちが出てくる。高貴な薫と
の繋がりも願ってもないことだからである。ところが英訳では、「常
陸介はなんとか涙の一粒か二粒を落とすことに成功した」と、「作
り泣き」を示唆する訳し方になっている。また、続く「さるは、お
はせし世には、申／＼、かゝるたぐひの人しも、尋ね給ふべきにし
も、あらずかし」²¹は、現行の多くの注釈書では、語り手の評言と捉
えられているが、英訳では常陸介自身の見解として訳されている。
英訳では常陸介は冷静に物事を見られる人物として描かれており、
中将の君に合わせて「作り泣き」をするのも、そのような英訳に固

有の人物像の反映と考えられる。

本節では続篇で男性の〈涙〉が削られる十例を詳細に検討した。続篇で削られる男性の〈涙〉全体を通じての傾向として、脇役の〈涙〉が削られることが多いことが指摘出来、主人公として、続篇全体を通じて最も多くの〈涙〉を流す薫の、〈涙〉が一例を除いて削られないのは特筆すべきことだろう。何故薫の〈涙〉が削られなかったのか、必ずしも理由は明確ではないが、早蕨巻の弁の尼のように一つの場面で五箇所の〈涙〉が書かれたり、浮舟巻の浮舟が十五例・手習巻の尼君が十一例と特定の巻・場面で同一人物の涙が集中的に描かれる〈涙〉と異なり続篇を通じて〈涙〉を流すものの、一卷・一場面にそれほど〈涙〉が集中しない薫の〈涙〉は、削られるにこかったことは指摘出来るだろう。

四 おわりに

サイデンステッカー氏の『源氏物語』英訳は、宇治十帖から始められたことが知られている²³。本稿の英訳続篇の〈涙〉の調査にあたっては、翻訳の進行に従って訳者の〈涙〉の扱いが変化していく可能性を想定したが、訳者が〈涙〉を削る手法は正篇と共通のものが多く、正篇同様、大幅な改変には慎重な姿勢が見て取れた。一方、続篇では女性の〈涙〉が数の上では男性の倍以上削られており、削られた〈涙〉の男女差に大きな差がない正篇とは大きく異なる結果となった。このことは、そもそも続篇における女性の〈涙〉が男性の一・七倍ほどあること、英訳では同一人物の〈涙〉が同一場面・同一巻に見られる際に、〈涙〉が削られる傾向にあることが関わっていると考えられる。紙幅の関係で触れられなかったが、英訳にお

いて〈涙〉が加えられる場合も、男性が三箇所、女性が六箇所²⁴と女性が男性の倍加えられていることも指摘しておきたい。〈涙〉が削られる場合同様、続篇全体の女性の〈涙〉の多さが影響しているものと思われる。

注(1) 本稿におけるサイデンステッカー訳の引用は、Sedensicker, Edward. *G. The Tale of Genji*. Alfred A. Knopf, New York, 1976 に于て。

(2) 以下、「前稿」はすべて拙稿「サイデンステッカー訳『源氏物語』正篇の〈涙〉」（藤原克己監修・高木和子編『新たな平安文学研究』青簡舎、二〇一九）を指す。

(3) 伊井春樹編『世界文学としての源氏物語—サイデンステッカー氏に訊く—』笠間書院、二〇〇五。他に、E. G. サイデンステッカー「紫式部に忠実であるということ—『源氏物語』を英訳して—」『西洋の源氏日本の源氏』笠間書院、一九八四（初出 一九七四）にも同様の言及がある。

(4) 前掲、注三 伊井編著。

(5) 室田知香「六条御息所の涙と風景—『源氏物語』賢木巻「おほかたの秋の別れも」の歌は誰の歌—」『群馬県立女子大学 国文学研究』第三十九号 二〇一九・三。

(6) 以下に、英訳で「削られた」〈涙〉の用例が見える大系本の巻名・分冊数・頁数と対応する英訳の頁数を示す。また、男性の〈涙〉には*を付す。竹河・四一・二六六/759*、竹河・四一・二七三/763、竹河・四一・二八一/768*、橋姫・四一・三〇一/778、橋姫・四一・三二八/785、椎本・四一・三五一/807*、椎本・四一・三五二/807、総角・四一・三九七/830、総角・四一・四二八/847*、総角・四一・四五六/863*、総角・四一・四五九/865、総角・四一・四六五/868、総角・四一・四六九/870*、早蕨・五

一三二/879 (同一頁に二箇所)・宿木五一九五/918*・東屋・五一一三
 四/938・東屋・五一一七一/956・東屋・五一一七九/960・東屋・五
 一八三/963・浮舟・五一一三三/988・浮舟・五一一四八/998・浮舟・
 五一一七一/1010・浮舟・五一一七四/1011・蜻蛉・五一一九七/1022*
 蜻蛉・五一一三〇〇/1023・蜻蛉・五一一三〇三/1024・蜻蛉・五一一三〇九
 /1028*・蜻蛉・五一一三二二/1034・手習・五一一三五六/1051・手習・
 五一一三七九/1063-4・手習・五一一三九三/1070・手習・五一一四〇三/1076。
 なお、統篇の〈涙〉全体の用例二五五例には男女いずれにも分類出来な
 い四例を含む。

(7) 前掲 注三、伊井編著。

(8) 「おきに立つ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならま」(五一一二)
 「人はみな急ぎたつめる袖のうらにひどり藻鹽を垂るゝあまかな」(五
 一一三) ち「“Tears came first. I should have flung myself into / A stream
 of tears that would not have left me behind” (879) / “And there they
 are, so busy getting ready. / And wet are the sleeves of the solitary
 fishwife.” (同)。

(9) 「C」(乳母)「…この御事(常陸介第二女ト少将ノ結婚ガ)、侍らざら
 ましかば、うちくゝ、安からずむつかしき事は、折く侍りとも、なだ
 らかに、年頃のまゝにて、おはしますべき物を」など、うち泣きつゝ言
 ふ。君は、只今は、ともかくも、思ひ廻らやれず。(五一一七)「…」
 If it hadn't been for him and his grand ideas, they said, well, there
 might have been a little fighting in the family from time to time, but
 things would have gone on pretty much the same." But the girl was
 beyond worrying about her mother. (956-7) 「D」中將の君「…曹司
 へゝある者も、召し出し、使ひ給く。宿直人の事なべ、言ひ控て侍
 るも、いと後ろめたけれど、かしこに、腹立ち恨みらるゝが、いと苦し
 ければ」と、うち泣きて歸る。少將のあつかひを、守は、又なき物に思

ひ急ぎし…(五一一七九)「…」I've sent some women to look after you
 and given orders to the guards. But I know I'll go on worrying—and
 everyone at the other house is furious." The governor had gained in
 the lieutenant what was for him a priceless jewel. (960) 「E」「母君な
 ぐや」と、いと、あはれなる文を書きつゝ、おこせ給ふ。「おろかならず、
 心苦しう、思ひ披ひ給ふめるに、かひなう、もつ扱はれたつまつるん」と
 と、うち泣かれたつ…(五一一八三) An affectionate letter came from
 the governor's wife, alive to her maternal duties as never before. The
 girl was sad for her mother too. She had tried so hard, and in vain.
 (963)。

(10) 「御心はへの、かゝらで、おいらかなりしつゝ、のどかに、嬉しかり
 しか。(略)」(五一一三三) "Life was much easier and much pleasanter,"
 said Kaoru, "back in the days when you were not quite so given to
 tears. [...]" (988)。

(11) 前掲 注三、サイデンスタッカー書。

(12) 前掲 注三、伊井編著。

(13) 須磨・二一三二／236・ 柏木・四一三二／637

(14) 前掲、注三、サイデンスタッカー書。

(15) 椎本・四一三五二／807

(16) 四一三六五／759

(17) 「よかに、ながめ給からん」と、思ひやるに、「同じ心なる人もなき
 物語も聞え」とてなむ。はかなくも積もる年月かな」と、涙を一目
 浮けておはするに、老人は「いん、更に、せまきあへず。(五一九五)
 "I can guess how sad life is for you. I have come because only you
 understand certain things I long to talk about." There were tears in
 his eyes. "How quickly time does go by!" The old woman was weeping
 quite openly. (918)。

(18) 鈴木貴子「葵の上の死と涙」『涙から読み解く源氏物語』笠間書院、二〇一〇。

(19) 前掲、注十八鈴木書「宇治中の君の涙」。

(20) 「……」に來ては、おはしまし、夜な／＼の有様、いだかれたてまつり給ひて、舟に乗り給ひしけはひの、あてに、美しかりし事などを、思ひ出づるに、心強き人なく、あはれなり。右近、あひて、いみじう泣くも、つどわりなり」(五二九六)「……」land how the memory of those nocturnal visits, and of the girl too, so fragile and so beautiful on the night of the river crossing, was enough to dissolve the least sensitive of them in tears.」(1022)。

(21) 『新潮日本古典集成』『新編日本古典文学全集』等。

(22) 私に数えた薫の〈涙〉は続篇全体で四四例、宇治十帖で四三例。前掲注 鈴木貴子「宇治中の君の涙」は宇治十帖の薫の〈涙〉を四十例とする。数え方の基準の違いがあり、用例数は一致しないが、薫が続篇で最も多く泣く人物であることには変わらない。

(23) 前掲、注三伊井編著、Siedensticker, Edward, G. *Genji Days*: Kodansha International Ltd., Tokyo, 1977. には、一九七一年三月三十一日に宇治十帖の翻訳原稿が完成した旨が見える。

(24) 竹河・四二九一～二／773、椎本・四一三七二／817*、宿木・五一七〇／907*、宿木・五一八五／913*、宿木・五一九五／918、東屋・五一五三／948、東屋・五一六二／952*、浮舟・五一二二二／988、浮舟・五一二四四／986*、手習・五一三四八／1047。

受贈雑誌(一)

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 京都大学國文學論叢 | 京都大学大学院文学研究科國語学国文学研究室 |
| キリスト教文学研究 | 日本キリスト教文学会 |
| 金城日本語日本文化近代 | 金城学院大学日本語日本文化学会 |
| 近代文学研究 | 神戸大学「近代」発行会 |
| 群馬県立女子大学国文学研究 | 日本文学協会近代部会 |
| 藝文研究 | 群馬県立女子大学国語国文学会 |
| 言語表現研究 | 慶應義塾大学藝文学会 |
| 高知大國文学 | 兵庫教育大学言語表現学会 |
| 國學院雜誌 | 高知大学国語国文学会 |
| 國學院大学大学院文学研究科論集 | 北海道教育大学語学文学会 |
| 國語学研究 | 國學院大學 |
| 國語学 | 國學院大学大学院文学研究科科学会 |
| 國語国文学 | 東北大学大学院文学研究「国語学研究」刊行会 |
| 國語國文學報 | 福井大学言語文化学会 |
| 國語國文研究 | 愛知教育大学国語国文学研究室 |
| 國語国文論集 | 北海道大学国語国文学会 |
| 國語と教育 | 安田女子大学日本文学会 |
| | 大阪教育大学国語教育学会 |